

カトリック麹町 聖イグナチオ教会
2022 年度 フォローアップ講座 第 3 回

ゆるしの秘跡

—神との新たな出逢い—

平林冬樹 S.J.

洗礼・堅信・聖体・婚姻・叙階・病者の塗油は、神が、教会をとおして私たちにくださる無償のめぐみのしるしであり、これを秘跡と呼んでいます。今回のテーマである「ゆるしの秘跡」は、もちろんその名のとおり、秘跡の一つです。しかしこの秘跡は、他とは少し違った趣があります。人間にとって、とても重いテーマである罪と向き合う秘跡だからでしょうか。なんとなく近づき難く、引いてしまいたくなる印象がつかまとうかもしれません。

ゆるしの秘跡の意義

罪のゆるしは、神と私との間で密かに実現する個人的なできごとではないでしょうか。なにも司祭が間に入って教会の中でゆるされる必要があるのか。そうした問いは、古くから存在します。事実、ほとんどのプロテスタントの教会は、この立場です。カトリック教会にもっとも近いとされるルーテル教団や英国国教会（アングリカン）は、制度として残しているとしても。実際にこれを行ってはいないようです。

では、もとの問いに戻りましょう。罪とそれを生む悪は、完全に個人の問題なののでしょうか。個人の罪と悪は、教会には何の関係もないのでしょうか。

罪は、たとえそれが誰にも知られずに済んでいるとしても、ボディブローのように社会と教会を傷つけ、弱めます。なぜなら個人と共同体は、密接に繋がっているからです。たとえば、たまたまある夫婦の仲が悪く、とばっちりや、こどもに辛く当たり続けるとしましょう。その子は、精神的に疲弊して、同級生に乱暴な振る舞いをしたり、非行に走ったりするかも知れません。元は、あくまで家庭内の問題ではあっても、社会に影響を及ぼします。司祭が、信者に内緒でギャンブルにはまっているとしましょう。それは信徒に知られていなくとも、一所懸命、神に向かおうとしている信仰共同体を弱めます。このように、罪は、個人的なものであり人に知られていないとしても、共同体全体に関わるのです。ちなみに古代教会では、ゆるしの秘跡は、公開で行われていました。いまは、司祭が全教会を代表し、イエス・キリストのみ名によって告白を聞きます。そして教会の務めをとおして神のゆるしを伝えます。このようにゆるしの秘跡は、司祭と信者の個人的なやりとりに見えて、じつは、教会の公の場なのです。

ゆるしの秘跡も、喜びの場

上記を納得したとしても、ゆるしの秘跡は、なんとなく敬遠したくなるような印象を与えます。他の秘跡は、人ひとが集まって喜びあう祝いの雰囲気の中で行われます。それに対してゆるしの秘跡は、個人的であり、他人に話すことをはばかるような、自分の醜い面を、親しくもない司祭に小部屋で打ち明けます。会衆に紛れて参加できる他の秘跡と違い、ゆるしの秘跡は、一対一で司祭と向き合う個人作業です。他の信者が、秘跡の場で、どんなふう話すのか、知るよしもあります。自白しに行く犯人のような心地がして、なかなかゆるしの秘跡を受けに行く勇気が湧かない人も多いでしょう。ではほんとうに、ゆるしの秘跡には、喜びと祝いの雰囲気が、ないのでしょくか。自分の過ちを悔い悲しみに暮れる沈痛な場なのでしょうか。そこでまず、秘跡がもつ性格を振り返ってみましょう。

秘跡とは、「目に見えない『神のめぐみ』の、目に見える効果的なしるし」です。「効果的」とは、実際に人の存在を変え、成長させる力があるということです。しかも、秘跡に与った人は、たしかに神のめぐみをいただいていると、教会が公に保証します。だから秘跡を受けた人は、神のめぐみを受けたしるしで

ある神との親しさ、喜び、勇気、希望、生きる力、耐える強さ、正しさをいただきます。ここで言う「めぐみ」(gratia) のもとの意味は、代価なしでいただく贈り物です。つまり秘跡は、りっぱな信仰とか優れた行いに対するご褒美ではありません。神からの無償の贈り物です。

「ゆるしの秘跡」(reconciliation)

大前提：

- * **罪の概念:** イエスの教える罪は、犯罪や掟破り、ルール違反ではない。神から離れることを罪と呼ぶ。
- * **和解:** この秘跡の理解の鍵は、「和解」。和解は、仲違いの解消ではない。離れていた者同士の新たな出会い。イエスは、神から離れた者を呼び戻すために来た。和解と喜びは、一つ。
- * 神は、ご自分から離れた者を罰することを望まない。神に立ち帰るよう願う。
- * ルール違反の犯人に罰を与えてから釈放するというイメージは、この秘跡にふさわしくない。
- * どの秘跡も、慈しみの神と出会い、それを喜ぶ場である。ゆるしの秘跡も同じ。この秘跡は、人を罪と罰から解放する法的な手続きではない。神は慈しみの父であり、罰を言い渡す裁判官ではない。イエスは、ご自分が苦しんだからこそ、人の苦しみに共感する(ヘブライ 5.7)。
- * 道徳的に正しく生きることと、信仰に生きるとは、同じとは言えない。私は愛されている罪びとであることに気づかせてくれる秘跡、それがゆるしの秘跡である。

この秘跡のプロセス

和解には仲介者と儀式（五感で分かるしるし）が必要。教会は、父なる神と私との和解を仲介するキリストの代理であり、和解をもたらす具体的なしるしが、「ゆるしの秘跡である」。

- ① **回心:** 慈しみの神に赦され、私が罪びとであったとき、すでに愛されていたことを悟って神に立ち帰りたいと願う。
- ② **告白(賛美):** 神に立ち帰ることを父である神に告げ、ゆるしの神に感謝と賛美を告げる。
- ③ **和解:** 和解は、神との新たな出逢いであり、それを実現するために人間がすることは、回心と立ち帰り。しかし、私が回心して立ち帰る前、すでに神は、ゆるしている。
- ④ **秘跡の効果:** 喜び、勇気、希望、生きる力、耐える強さ、正しさ

* イスラエルの伝統では、赦しと和解は一つ。真の赦しは神からしか来ない。

* 赦しと和解は一つ。和解には上記のプロセスが必要。赦しは、罪人が神と再び出会う歩みの到達点というより、その第一歩。だからこの秘跡の目的は、罪の赦しではない。神との出会い（和解）。

* 和解には、ゆるしより大きな喜びがある。私が罪に陥っていた時、神はすでに私をゆるし、変わらず私とともにいてくださる。和解とは、これに気づき、神に立ち帰って喜びをともにすることである。

* だから本来、この秘跡は、「和解の秘跡」「神との新たな出会いの秘跡」と呼んだほうがよい。

* 初代教会では、福音を伝えることと和解をもたらすことは、一つだった。和解をもたらすことは、教会共同体の大きな使命である。

ゆるしの秘跡の聖書的背景

ゆるしの秘跡の素晴らしさを理解するために、放蕩息子のたとえやザアカイの回心の姿が役立ちます。

放蕩息子のたとえ一父の無条件の愛— (ルカ 15:11-32)

¹¹ また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。¹² 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。¹³ 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。¹⁴ 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。¹⁵ それ

で、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。¹⁶ 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。¹⁷ そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。¹⁸ ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお

父さんに対しても罪を犯しました。¹⁹ もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』²⁰ そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。²¹ 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』²² しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。²³ それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう²⁴ この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。²⁵ ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。²⁶ そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。

²⁷ 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』²⁸ 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。²⁹ しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。³⁰ ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』³¹ すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。³² だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか』」。

*弟が、父のもとに帰ろうと思いついたきっかけは、空腹である。

*父は、弟の帰りを待ちわびていた。だから弟が、まだ遠くにいるのに、父は彼に気付いた。

*弟が、父の家に帰る道々考えた詫びのことばを、父親は半分も聞かず、弟を歓迎してもてなす。

*兄の言い分は、筋がとおっていて社会的良識にもかなっている。弟に対する父の姿勢は、常軌を逸している。

*このような父親は、誰もいない。このたとえば、神だけの愛を示している。

徴税人ザアカイ—回心は、喜びを呼び起こす— (ルカ 19:1-10)

² ザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。³ イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見るができなかった。⁴ それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。⁵ イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。⁶ ザアカイは急いで降りて来て、喜んで

イエスを迎えた。⁷ これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった」。⁸ しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」⁹ イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」。¹⁰ 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。

信仰に入るには、回心、神に立ち帰ることが欠かせません。それなしに神のものになることは不可能です。回心は、一回限りではありません。日々の信仰生活の中で、たびたび回心し、神に立ち帰り続ける必要があります。

神の愛の激しさ

イエスは言います。「今日、この家に救いが訪れた」(19:9)。「訪れた」と訳されている語は、もとのギリシャ語では、「出来事が起こった」という意味をもっています。ザアカイは、興味本位で出かけて行き、イエスを見ようと木に登りました。イエスと話す準備など、何もしていません。思ってもみない、そして望んでいたわけでもない、不意の出来事が、ザアカイの身の上に起こったのです。

そもそもザアカイとは、どんな人だったでしょう。ユダヤ人を酷い目に合わせているローマ帝国の手先になって高い税金と手数料を取り立てる徴税人たちの頭です。腕っ節の強い手下をあごで

使い、容赦なくふんだくる嫌われ者だった人だったに違いないでしょう。

新共同訳聖書「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。原語は、不自然なほど強い意味合いです。「今日、あなたの家に泊まらねばならない」、「～ことになっている」です。これは、イエスをとおして実行される神の愛の計画だと言うのです。何があっても、神は、その愛を貫きとおす。神の愛の激しさが、イエスを十字架にかけた人間の罪の激しさに勝つのです。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい」(19.5)。ザアカイは、びっくりしたでしょう。「ザアカイは急いで降りて来て」(19.6)。彼は、ただイエスのことばかり、引きずり降ろされるように木から降りました。ザアカイは、あっという間に、イエスのもたらす救いに吸い込まれてしまったのです。

これは、ザアカイだけの話しではありません。自分が計画したとおりに神と出逢い、自分の計画どおりに信仰生活を営んでいる人は、きわめてまれでしょう。自分の見通しよりも遙かに優れた神のめぐみにとらえ込まれて、いま、ここにこうしている。これが、神の救いを体験した人の共通の思いではないでしょうか。

晴れやかな回心

「ザアカイは、主に言った。『主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します』」(19.8)。

当時は、慈善のためであっても、財産の半分以上を寄付しないようにとの教えがあったそうです。また過大に取り立てた金額を返すとき、その20%を上乗せした額を賠償金として支払えば良いとの規定があったと言われます。しかしザアカイは、ファリサイ派からなじられてむっとし、その場の勢いで、こんなに太っ腹な約束をしてしまったのでしょうか。そうであれば、一夜明けて冷静になり、財産が惜しくなっても不思議ではありません。居丈高に取り立てた金銭を一軒ごとに謝りながら返して廻るなど、恥ずかしくて気が重いことです。勇気がいります。ばつが悪いでしょう。しかしザアカイは、爽やかなところで、約束のお金を返して歩いたと思います。神の救いが、私だけでなく、私の家を訪れた(19.9)のですから。

悔い改めのしるしは、涙であると思われがちです。しかし自分の罪深さに気付くこと、神に立ち帰ることは、悲しみよりも喜びであることが分かります。喜びに満たされたザアカイが、主の前に立つ姿が目には浮かびます。ザアカイの喜びは、自分の本当の値打ちを知った喜びです。見失っていた自分自身を取り戻し、神から離れ、失われていた自分が神に立ち戻った喜びです。貪り取ることに幸せを感じていたザアカイは、いま、与えられたものを感謝して受け、それを隣人と分かち合って生きるところに、真の値打ち、生きる幸せと喜びがあることを知ったのです。こうしてザアカイは、その名のとおりに、正しい人になりました。ザアカイとは、「正しい人」という意味の名です。

黙想のためのヒント

1. 放蕩生活を送った後、我に返った弟は、何が自分の罪であると思ったのでしょうか。(15章18節)
2. 私は、どんな状況のとき、我に返って神のめぐみに気づくのでしょうか。(15章14-17節)
3. 父は、いつ、この弟をゆるしたのでしょうか。
4. 父は、帰ってきた息子をかき抱き、使用人にもてなしを命じます。弟が事前に考えた詫言の言葉を全部言うのを遮って、父はもてなしを命じます。なぜでしょうか。(22-24節)
5. 忠実な兄の言い分は、一見、理に叶っているようです。でもどこが事実と違うでしょう。(15章29-30節)
6. ルカ福音書15章でイエスが語る「法統息子」のたとえ話は、来たるべき神の国を「ともに楽しみ喜ぶ」うたげのたとえです。私が、父である神と「ともに楽しみ喜ぶ」には、どうすればよいとイエスは教えておられるでしょう。「放蕩息子」のたとえと、「徴税人ザアカイ」(ルカ19.1-19)を読み合わせて考えてみましょう。